様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０６９９８

研究課題名（和文）不合理または病的な信念の原因と結果についての研究

研究課題名（英文）Causes and Effects of Irrational or Pathological Beliefs

研究代表者
宮園　健吾（Miyazono, Kengo）

広島大学・総合科学研究科・准教授

研究者番号：２０７８０２６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は不合理または病的な信念についての２つの研究プロジェクトから構成されている。プロジェクト１では「信念の原因」に焦点を当て、妄想的な信念が形成されるプロセスについて研究を行う。プロジェクト２では「信念の結果」に焦点を当て、信念と振る舞いとの間の不整合性について研究を行う。１年目はプロジェクト１を中心に研究を進め、妄想的信念についての「ハイブリッド理論」を提示した。２年目はプロジェクト２を中心に研究を進め、「PPR説」によって信念と振る舞いとの不整合性を説明できることを示した。これらの成果を含む２冊の書籍（Routledge及びPolity）が近く出版予定である。

研究成果の概要（英文）：The aim of this project is to explain the causes and the effects of irrational and/or abnormal beliefs. The subproject 1 aims to explain the cause of abnormal beliefs (i.e., delusions). I proposed a hybrid theory of delusion formation, which combines the basic ideas of two influential theories; i.e., two-factor theory and prediction-error theory. The subproject 2 aims to explain the behavioural consequences of irrational beliefs or, more precisely, the the irrational incoherence between beliefs and behavioural outputs. I argue that many cases of belief-behaviour incoherence are explained in terms of what Ruth Millikan calls 'pushmi-pullyu representations' (PPRs).The outcomes of this project are incorporated in two forthcoming books from Routledge and Polity.

研究分野：哲学

キーワード：信念　妄想　不合理性　精神疾患

１．研究開始当初の背景

英語圏の心の哲学においては、近年、不合理性や精神疾患について盛んに研究されてきており、研究代表者もまた不合理な信念や病的な信念について継続的に研究を行ってきた。不合理な信念や病的な信念を理解するためには、その特徴的な（１）原因、ならびに（２）結果を明らかにする必要がある。

（１）原因：「妄想」（delusion）とは、明らかな反証にもかかわらず固く保持され、かつ、社会的、文化的あるいは宗教的な影響によっては（完全には）説明できないような、不合理な信念である。どうして妄想は生じるのだろうか？妄想的信念の原因は何だろうか？妄想的信念の原因の研究において、現在、とりわけ強い影響力を持っているのは、二要因理論（two-factor theory）および予測エラー理論（prediction-error theory）である。二要因理論によれば、妄想形成のプロセスは二種類の要因（例：異常な知覚経験と推論バイアス）によって説明される。これに対して、予測エラー理論によれば、妄想は予測エラー（予測と実際のインプットとの齟齬）処理におけるなんらかの異常の産物に他ならない。

（２）結果：通常、信念は、その結果として、その信念（及び欲求）と整合的な振る舞いを引き起こす。だが、信念（及び欲求）と振る舞いは常に整合的であるわけではない。Tamar Gendler (2008)は、近年の心理学的な成果を積極的に参照しつつ、信念と振る舞いとの不整合性がわれわれの日常的な生活の様々な場面で見出されることを主張した（例：自分の足場は絶対に安全だと信じているにもかかわらず、高層ビルの屋上から下を見た途端、恐怖に襲われて動けなくなるケース）。Gendler は、これらのケースを説明するためには、信念（及び欲求）によって振る舞いを説明する伝統的な民間心理学的枠組みでは不十分であると論じ、「alief」とよばれる新たな種類の心的状態を導入したのであった。

２．研究の目的

本研究は２つの研究プロジェクトから構成されている。プロジェクト１では「原因」に焦点を当て、具体的には、妄想的な信念が形成されるプロセスについて研究を行う。プロジェクト２では「結果」に焦点を当て、具体的には、信念と振る舞いとの間の不整合性について研究を行う。

（１）プロジェクト１：妄想的信念の原因：本プロジェクトでは、研究代表者のこれまでの研究成果を踏まえ、その上で、二要因理論と予測エラー理論が、単に理論的に両立可能というのみならず、実際にある特定の仕方で統合されるべきであることを示す。具体的には、Ryan McKay (2012)による二要因理論を土台としつつ、これに Phil Corlett ら(2010)による予測エラー理論のアイディアを統合したものを提示する。その上で、この理論が、（A）二要因理論、予測エラー理論双方の利点を引き継いでいること、（B）それぞれの理論を支持するデータに統一的な理解を与えること、そして、（C）様々な種類の妄想を統一的に説明できることを明らかにする。

（２）プロジェクト２：信念と振る舞いとの不整合性：本プロジェクトの目的は、Gendler による alief 説の難点を克服する、信念と振る舞いとの不整合性についての新たな理論を提示することである。具体的には、Ruth Millikan (1995) が提示した「pushmi-pullyu representations (PPR)」（信念や欲求よりも進化論的に古く、また、人間以外の動物にも広く見られる種類の原始的な表象）というアイディアを導入することで信念と振る舞いとの不整合性がうまく説明されることを示し、同時に、この PPR 説が alief 説の難点を克服していること、とりわけ、Gregory Currie & Anna Ichino (2012)による alief 説批判を免れていることを明らかにする。

３．研究の方法

本研究計画は、不合理な信念、病的な信念の原因と結果について研究を行い、その成果を、国際的な学術雑誌、書籍にてアウトプットする試みである。

研究成果の質を高めるために、当該分野の専門家とのディスカッションや国際学会などでの研究発表を通じて、本研究を練り上げていく。研究の初期段階において、専門家とのディスカッションを通じて論文の基本的な構想を固める。次に、論文の原稿を国際学会等で発表し、そこで得られたフィードバックを最終的な論文に反映させていく。

４．研究成果

１年目はプロジェクト１を中心に、妄想的信念の原因について研究を行った。二要因理論と予測エラー理論とを統合したハイブリッド理論を定式化し、それを学会発表(10, 11, 15, 19)などの形で発表した。Ryan McKay (Royal Holloway, University of London)との共同研究に基づく共著論文を執筆し、現在査読中である。

２年目はプロジェクト２を中心に、信念と振る舞いとの不整合性について研究を行った。Gendler による Alief 説と研究代表者による PPR 説とを比較検討し、後者がよりすぐれていることを論証した。現在のところ学会発表(6, 8, 9, 12, 13, 17)が主な成果であるが、そこでのフィードバックを得て、雑誌論文の執筆を進めている。プロジェクト２に関連して、Neil Sinhababu の *Humean Nature* (OUP Press, 2017)の Book Symposium に寄稿し(1)、また、Alessandro Salice (University

College Cork)との共同研究に基づく共著論文を執筆した（査読中）。

両プロジェクトの成果は *Philosophy of Psychology: An Introduction* (with Lisa Bortolotti, Polity) 及び *Delusions and Beliefs: A Philosophical Inquiry* (Routledge)という２つの書籍に反映されている。本研究期間の大部分はこの２冊の執筆に費やされ、実質的に、これらが本研究の主な成果物と言える。後者は現在印刷中であり、前者は執筆作業の後半に至っている。

〈文献〉

Corlett, P. R., Taylor, J. R., Wang, X. J., Fletcher, P. C., & Krystal, J. H. (2010). Toward a neurobiology of delusions. *Progress in Neurobiology*, 92(3), 345-369.

Currie, G., & Ichino, A. (2012). Aliefs don't exist, though some of their relatives do. *Analysis*, 72(4), 788-798.

Gendler, T. S. (2008). Alief and belief. *The Journal of Philosophy*, 105(10), 634-663.

McKay, R. (2012). Delusional inference. *Mind & Language*, 27(3), 330-355.

Millikan, R. G. (1995). Pushmi-pullyu representations. *Philosophical Perspectives*, 9, 185-200.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① K. Miyazono, 2018, "Vivid representations and their effects", *Rivista Internazionale di Filosofia e Psicologia*, 9(1), 73-80.（査読なし）
DOI: 10.4453/rifp.2018.0007

② M. Kasaki & K. Miyazono, 2016, "Book review: *Knowledge through Imagination*", *Journal of Mind & Behavior*, 37(2), 175-182.（査読なし）
https://philpapers.org/rec/KASBRK

〔学会発表〕（計 20 件）

① K. Miyazono, "Hume on the phenomenology of belief", Setouchi Philosophy Forum: Hume & Berkeley, February 20, 2018, at Hiroshima University.

② 宮園健吾「ヒュームと共感のバイアス」瀬戸内哲学研究会ワークショップ：共感と倫理（2018 年 2 月 15 日、広島工業大学）

③ 宮園健吾「二人称的観点の認識論？」因果・動物・所有：一ノ瀬哲学をめぐる対話（2017 年 12 月 23 日、東京大学）

④ 宮園健吾「現象学と分析哲学における内観的方法」瀬戸内哲学研究会（2017 年 11 月 23 日、岡山大学）

⑤ 宮園健吾「知覚の現前的現象性（presentational phenomenology）について」哲学会第五十六回研究発表大会（2017 年 10 月 28 日、東京大学）

⑥ K. Miyazono, "Implicit biases and pushmi-pullyu representations", The 17th Biennial Conference of the International Society for Theoretical Psychology, August 21, 2017, at Rikkyo University.

⑦ K. Miyazono, "Experimental psychology and architecture of imagination", Workshop: Art & Mind, August 11, 2017, at University of Tokyo.

⑧ Salice & K. Miyazono, "Being one of us: Group identification, joint actions and collective intentionality", Tokyo Workshop on Social and Collective Self-Conscious Emotions, July 2, 2017, at University of Tokyo.

⑨ K. Miyazono, "Aliefs and pushmi-pullyu representations", PERFECT Seminar, March 27, 2017, at University of Birmingham.

⑩ K. Miyazono, "A hybrid theory of delusion formation", PERFECT Reading Group, March 27, 2017, at University of Birmingham.

⑪ K. Miyazono, "A hybrid theory of delusion formation", Philosophy, Psychology, and Informatics Group, March 22, 2017, at University of Edinburgh.

⑫ K. Miyazono, "Implicit biases and pushmi-pullyu representations", Minority and Philosophy Group at Leeds, March 21, 2017, at University of Leeds.

⑬ K. Miyazono, "Intergroup bias, emotion, and pushmi-pullyu representation", Social Self-Conscious Emotions: The 2nd Cork Annual Workshop on Social Agency, March 16, 2017, at University College Cork.

⑭ K. Miyazono, “Perception without presentational phenomenology”, Philosophy Research Seminar, March 14, 2017, at University College Cork.

⑮ 宮園健吾「妄想の形成と維持」シンポジウム『精神医学の哲学』（2017 年 3 月 5 日、東京大学）

⑯ K. Miyazono, “The evolutionary debunking argument defeats itself”, Current Trends in Analytical Philosophy, August 22, 2016, at Yonsei University.

⑰ K. Miyazono, “Implicit biases and pushmi-pullyu representations”, The 3rd Conference on Contemporary Philosophy in East Asia, August 20, 2016, at Seoul National University.

⑱ K. Miyazono, “Perception without presentational phenomenology”, Philosophy of Mind & Mental Illness Symposium, July 30, 2016, at University of Tokyo.

⑲ K. Miyazono, “A hybrid theory of delusion formation”, The 31st International Congress of Psychology, July 26, 2016, at PACIFICO Yokohama.

⑳ K. Miyazono, “The evolutionary debunking argument defeats itself”, UHamburg-UTokyo Workshop: Language & Reality, June 25, 2016, at University of Tokyo.

〔図書〕（計 1 件）

① K. Miyazono, 2018, *Delusions and Beliefs: A Philosophical Inquiry*, Routledge.（単著：印刷中）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://kengomiyazono.weebly.com/

６．研究組織
(1)研究代表者
宮園　健吾（MIYAZONO, Kengo）
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：20780266

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）